

時代は歌を作る。
だが、そんな歌のために生涯を
苦しみの中に生きた歌手もいた。
渡辺はま子

文 山川 智

横浜に生まれ、横浜に育った
祖父はアメリカ人、クォーターであった
歌の才能に恵まれ、

武蔵野音楽学校に学び、横浜の女学校で
音楽教師を務めたが、歌手への思いもだし難く
プロの歌手を目指した
初のヒット曲はハンセン病患者を取材した
放送劇「小島の春」の主題歌
『ひとり静』だった

が、唄われる歌は気持ちと掛け離れていった
『忘れちゃいやヨ』は「ネエ小唄」騒動となった
次いでヒットさせた中国題材の様々な歌
『支那の夜』『何日君再来』
『蘇州夜曲』……は

国民を中国に誘う
軍部の巧妙な戦術に利用された
それは生涯付いて回った悔恨だった

だから、戦後は歌で捕虜収容所の戦犯を慰めた
フイリピンの日本人戦犯が作詞作曲の
『あ、モンテンルパの夜は更けて』をレコード化し
フイリピンで戦犯の減刑・釈放を嘆願した
彼ら日本人戦犯は全員釈放され、帰国した
本名、加藤浜子、
愛称「おはまさん」
数奇な歌手生命は平成11年、
89歳で幕を閉じた



昭和歌謡 誕生物語 【第32曲目】

一支那の夜

渡辺はま子

その美貌と歌声で戦前から戦後にかけて「チャイナメロディーの女王」と呼ばれたのが『支那の夜』（西條八十作詞、竹岡信幸作曲）などのヒットで知られる渡辺はま子である。

はま子は武蔵野音楽学校（後の武蔵野音楽大学）を卒業後、音楽教師を経てレコード歌手に転身。レコード会社の方針で「ネーわすれエチャイヤーンヨ」と鼻にかかった声で歌わされた『忘れちゃいやヨ』（昭和11年発売）が意に反して大ヒットしたが、御上からは「婦女の嬌態を眼前に見る如き官能的歌唱」とみなされ、発売禁止の憂き目に遭う。

ところが、このヒットによりネエ小唄ブームに火が付き、『あ、それなのに』（美ち奴）、『ふんなのないわ』（ミス・コロムビア）といった類似曲が続々登場。そこで軍部は流行歌の傾向を変更させるべく「国民歌謡」を唱導。そのため、日中戦争が勃発すると、はま子の歌も『夢見る戦線』『明けゆく北支那』『愛国行進曲』と戦時色に彩られ、海軍病院などへの慰問を積極的に行なうようになった。

そんな中、昭和13年（1938）に発売されたのが『支那の夜』。当時、中国は戦火の真只中。激動の時勢に、静かでロマンチックな中国を描いたこの曲は、日本国民を中国へと駆り立てる、いわば日本政府によるプロパガンダだったのだ。数々のヒット曲を飛ばしながらも、戦争へとひた走る時流に抗うことができず

「愛国歌」を歌い続けた彼女は、軍部に命じられ中国の戦線最前線でも歌った。だが、天津で終戦を迎えることになったのはま子の胸には、戦地で浴びた喝采が、戦後苦い澱のように沈んでいた。

そんな気持ちを拭い去るかのようには彼女は、戦犯収容所や戦傷者病院へ慰問に出向いた。収容所を慰問の中で、やがて戦犯の作詞、作曲による『あ、モンテンルパの夜は更けて』に出会う。それをきっかけに国交のないフイリピンのモンテンルパにある収容所に抑留された戦犯の釈放、減刑にも情熱を注ぎ、全員釈放を勝ち取った。異郷の地で過酷な生活を強いられる多くの人々は、はま子の歌声に故郷を思い、ただただ涙を流したといわれる。

それでもはま子は「自分の歌に奮い立った兵士がたくさんの人を殺し、自分の歌で背中を押された兵士たちが戦場で命を落とした」として、生涯それを悔いたという。

一世を風靡した「チャイナメロディーの女王」もまた、素顔は戦争に人生を翻弄されたひとりの女性だったのである。

山川 智 ●1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 JYJを行く』（共にイーストプレス）、『ビュートキエメント 幸せのきずな』（リーブル出版）など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介』（スターツ出版）、『デキる社員』『狂食ギャル』共にイーストプレスなど多数。